

へえ、さすが余裕やなあ

急いで、講堂へ行った。
三十分以上の遅刻だ。

講堂は父兄と生徒でいっぱいだった。

もう整列していた受験生は
講堂での説明を終えて、どンドン、
教室へ順番に入って行くところだった。

お父ちゃんが、真っ青な顔をして、
とっさに、声を震わせながら、
どうしようか思案した。

講堂の前に立っている人
にお父さんは注目していた。

「どうしょ？

わしが行くべきか。

いや、違う。

やっばり、よっちゃん、

よっちゃんが行くべきや。

講堂の前に立っている人のとこへ
はよ、行きなさい。」

僕は、少し、はずかしかったが、
試験は諦めたくなかった。

僕の受験だから、僕自身の事だとは理解できた。
僕も男だ。



288